

平成 8 年度瀬戸内海東部海域赤潮広域共同調査（抄録）

酒井基介・湯浅明彦

本調査は、東部瀬戸内海の水塊構造と水塊の動き並びに *Chattonella* 栄養細胞の初期発生、増殖及びその他のプランクトンの動向について全体像を立体的に把握し、赤潮発生要因を明らかにするとともに、赤潮発生予察技術の確立を図ることを目的として、東部瀬戸内海関係 5 府県・水産庁及び民間機関と共同で実施した。

平成 8 年度における徳島県担当水域である播磨灘南東部での気象、海象及びプランクトンの出現動向について取りまとめたのでその概要を報告する。なお、詳細については「平成 8 年度赤潮対策技術開発試験（海域特性による赤潮被害防止技術開発試験）瀬戸内海東部海域赤潮広域共同調査報告書」を参照されたい。

1 気象

7 月中旬前半に梅雨明けとなり、7 月下旬以降晴れの日が多かった。特に、7 月下旬から 8 月上旬にかけて、気温は平年を大きく上回った。8 月下旬以降は曇りがちの日が多かった。また、台風は 7 月中旬と 8 月中旬に接近した。

2 海象

底層水温は 7 月中旬に 20℃ に達した。1m 層水温は、7 月中旬の台風 6 号通過後に急昇温し、それに伴い安定した成層を形成した。成層は 8 月中旬の台風 12 号によって崩壊し、その後形成されることはなかった。1m 層塩分は、台風による降雨後も極端に低下することはなく、概ね 32 以上で推移した。

3 プランクトンの出現動向

第 1 回調査の 7 月 1 日に *Chattonella* と *Gymnodinium mikimotoi* が濃縮試料から検出され、*G.mikimotoi* が 7 月中旬から、*Chattonella* が 7 月下旬から増加しはじめた。8 月上旬に *G.mikimotoi* が赤潮を形成し、*Chattonella* も同時期に今期最高の 7cells/ml に達した。8 月中旬に着色域は消失し、両種の栄養細胞はその後検出されたが、赤潮を形成することなく終息した。